

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

映像表現をめぐる考察：現場の視点から＜共同研究：
拡張された場における映像実験プロジェクト＞

メタデータ	言語: ja 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2020-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤田, 瑞穂 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009494

映像表現をめぐる考察

—現場の視点から

文 藤田 瑞穂

特殊かつ高価な機材を持たずとも、誰もが高画質の映像を撮影できるようになった現代、映像表現は一気に多様化してきた。現代美術を取り扱う展覧会で映像作品を目にしなないことの方がもはや少ない。こうしたなかで、芸術表現としての映像作品にフィールドワークなど人類学的手法を取り入れたものが多く現れてきている。また、人類学の分野においては、ハーバード大学感覚民族誌学ラボの実践など、芸術と人類学のコラボレーションともいえる取り組みが注目されている。さらには、人文科学においても写真、映像、音楽など芸術の手法を活用した研究の必要性を論じるアートベースド・リサーチという考え方が広まりつつある。こうした動向を踏まえ、本共同研究は、テクノロジーに依拠した、鑑賞に時間の経過をともなう表現様式（タイムベースド・メディア）としての「映像」を広義に捉え、学際的に考察することを目指すものである。

人類学と芸術をめぐる

本共同研究は、筆者が企画した感覚民族誌的な視点を取り入れた2つの展覧会の延長線上にある。それらを簡単に紹介したい。まず1つ目は「移動する物質—ニューギニア民族資料」（2017年、京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA）である。京都市立芸術大学芸術資料館は、1969年に美術調査隊（教員・学生数名による海外調査）によって収集された、ニューギニア島北東部のセビック川流域の神像や仮面、土器を中心としたコレクションを有する。非物質的な文化そのものを収集することはできないが、その地域の物質文化を持ち帰り、収蔵品に加えることは可能である。世界各地の美術館・博物館の収蔵品の多くは、同じようにさまざまな場所からの移動を経て保管されているものである。そこでこうした博物館収蔵品の「移動」に着目し、収蔵品の物質的側面に焦点をあてた展示を行うとともに、移動によって切り離されてしまった、かつてそれらがあった場所に満ちていた非物質的なものを、展示された物質と再び融合させることを試みた。

2つ目は「im/pulse：脈動する映像」（2018年、京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA）である。この展覧会は、幅広い学問領域の知と技術を融合させ、言語的な理解だけでなく、身体深部の感覚や感性へ作用させる表現が注目されつつあるなかで、その先の展開を文化人類学と芸術の双方の観点から探るための実験として企画したものである。出展者は、

感覚民族誌的観点から見ても優れたアプローチを取る映画監督のヴィンセント・ムーン（フランス）、即興的な身体の接触から始まるパフォーマンス・映像・写真など、発表形態を固定しない流動的な活動で国内外から高い評価を得るパフォーマンス集団のコンタクト・ゴンゾ（日本）、そして映像人類学者による研究会アンスロ・フィルム・ラボラトリー（日本）の3組とした。ヴィンセント・ムーンとコンタクト・ゴンゾは映像インスタレーションの展示に加えて会期中に複数回のパフォーマンスを実施し、アンスロ・フィルム・ラボラトリーは展示空間を用いた研究発表のほか、公開型のセミナーなどを行った。

これら2つの展覧会を企画・運営するなかで得た、人類学と芸術との親和性、また差異についてのさまざまな小さな気づきを本質的な考察につなげていくために、チームを結成してそれぞれの知と技術との交換を可能とする領域横断的な共同研究を組織するにいたった。

映像表現の可能性と問題点

本共同研究では、その後の展開として、文化人類学および芸術を専門分野とするメンバーとともに、字義通りの映像のみならず、映像的な要素を持つ表現・活動も含めながらその可能性や問題点、将来的展望などについて検証しているところである。研究対象をメンバーの専門分野に偏らせることなく、多様な視点から考えていくためにも、各研究会は特別講師による発表とメンバーの発表の2本立てで構成し（初回を除く）、議論の時間を長く設けている。また、各回で分断された内容ではなく、継続的な議論の生まれる場であるように留意している。



展示会「移動する物質—ニューギニア民族資料」（2017年、京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA、松見拓也撮影）。

藤田 瑞穂 (ふじた みずほ)

京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA (アクア) チーフキュレーター／プログラムディレクター。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。専門は現代美術、表象文化論、アートマネジメント。近年の主な展覧会企画に、ジェン・ポー「Dao is in Weeds」、ジョン・ジョナス「Five Rooms For Kyoto: 1972-2019」(ともに2019年、京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA) など。



展示会「im/pulse: 脈動する映像」におけるヴィンセント・ムーン作品展示風景 (2018年、京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA、来田猛撮影)。

これまでに取り扱ってきたテーマは「映像的な事象 (必ずしも映像の形態を取るものではなく、概念的に共通項を見出せるものを含む)」「映像による言語／非言語による語り」「映像の可能性／不可能性」「映像記録の加害性」など多岐にわたる。いずれも全体討論から浮かび上がってきた共通の関心事をさらに掘り下げる過程で焦点をあてることになったものである。そもそも映像は、記録媒体としての性質がかなり強い。図像と時間的要素とを同時に記録することで、写真、音声などと比べてもかなり多くの情報量を含めることが可能になる。そして冒頭でも触れた通り、技術の発達と映像機器の普及にともない、映像は単に記録としてではなく、多種多様な表現に用いられることが多くなっている。本共同研究で考察してきた前述のようなテーマは、映像という媒体にまつわる普遍的な問題をも含んでいる。いかなる映像表現においても避けて通ることはできない課題であるからこそ、各メンバーの普段の活動領域が異なるにもかかわらず、議論は白熱する。現在は、研究会ごとにこれらのテーマを行きつ戻りつしながら回を重ね、映像表現の可能性を捉えようとしているところである。

とくに、アートプロデューサーの田中みゆきによる「全盲者による映像の可能性／不可能性について」と、映像作家の満若勇咲による「制作現場から見たドキュメンタリーについて」の2つの発表から多くの議論が生まれた。

田中は、自らがプロデューサーを務めた映画『ナイトクルージング』(2019年、監督：佐々木誠)を例に、イメージとは果たして視覚によるものなのか、視覚障害者とイメージは共有可能か、という問いのもと、それを検証すべく多様なアプローチでイメージの共有を目指した実践や、そこから得

られた成果と限界について発表した。それはまさに本共同研究が表題にあげる「拡張された場における映像実験」であり、視覚に依拠しない映像鑑賞のあり方、またその不可能性についての討論は、参加メンバーにとって、この事例そのものに終わらず問題意識として心に強く残るものであった。

満若は、現在取り組んでいる映像作品と、これまで手がけた映像作品やテレビのドキュメンタリー番組での経験から得た映像にまつわる問題点について発表した。なかでも「ドキュメンタリーの加害性について」というトピックをめぐっては、映像だけに限らず、人を対象としたあらゆる表現や調査にまつわる問題でもあり、さまざまな意見が交わされた。非常に難しい問題でもあり、当日に何らかの結論が出たわけではなかったが、ドキュメンタリーの制作現場で活動する満若の報告から、文化人類学、芸術を専門とするメンバーが新鮮な着眼点を得たことは大きな収穫であった。

今後の研究会でも、映像的な事象、人類学における映像、芸術における映像において重視されるものの差異や、そういった評価軸の範囲を上回る映像表現のあり方、実験的要素として何が可能かを複数の視点から検討していく。そして、さまざまな形式での「記録」や文化人類学、芸術の双方における事例などを検証し、芸術表現としての映像との比較考察から「記録」と「表現」、またその先にあるものについて探る。

このように、専門分野の異なるメンバーがそれぞれの実践について相互に理解を深め、問題意識を共有してさらに新たな視点を得る場としての機能が、本共同研究の大きな特色だと言えるだろう。



展示会「im/pulse: 脈動する映像」におけるコンタクト・ゴンゾ作品展示風景 (2018年、京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA、来田猛撮影)。